

まえがき

大手前大学交流文化研究所では、年に一度シンポジウムを開催している。テーマは「文化と交流」を軸とし、最近のものでは「珈琲で語り合う人・文化・地域の交流（二〇二二年度）」、「コンテンツツーリズムと文化遺産（二〇二二年度）」、「コロナ禍と体験型イベント（二〇二〇年度）」、「占領期の都市空間を考える（二〇一九年度）」など、シンポジウムを主催する研究員の専門によりその内容は多岐にわたる。二〇二三年度のシンポジウムのテーマは「ポップカルチャーからみた日本」であり、本書はその内容を基に再構成したものである。さてこの序文では、タイトルにも使われているポップカルチャー、あるいはポピュラーカルチャーという語に属するコンテンツについて考えたい。

ポピュラーという英単語は、人気がある、よく知られている、大衆の、一般のなどの訳語があら

れる。したがって「ポピュラー」カルチャーの対象として想定されているのは、特定少数の特権的な人間ではなく、ある社会に属する大多数の人びと、ありふれた人間だということになる。だからポピュラー「カルチャー」は、そういった人びとが日常的に享受していたり、享受することができるカルチャーだといえるだろう。それは「権威を伴わないかたちで社会の中で共有され」、「メディアが強い力を持った現代社会特有の」、「一部の人ではない』『みんな』の中にある文化を」、「否定的ではないかたちでとらえようとするための言葉」なのである。

では、みんなの中にある文化とは、どういったものなのか。外務省は世界に向けた日本の魅力のひとつとして、ポピュラーカルチャーを通じた情報発信を推進している。この施策では、ポップカルチャーとは大衆向けの文化全般のことを表すが、「訴求力が高く、等身大の現代日本を伝えるもの」という意味でも使われている。具体的には、漫画、アニメ、映画、ゲーム、ライトノベル、ポピュラー音楽、テレビなどを指すとされている。この文言では、人びとに受け入れられているいくつかのジャンルがポピュラーカルチャーの例として示されている。さて、ここでひとつの疑問が生じる。それは、外務省が挙げたジャンル群は、従来の意味合いでいえばサブカルチャーに属するのではないかという問いだ。

アニメやマンガがポピュラーカルチャーなのかサブカルチャーなのかを論じるまえに、両者に共通する「カルチャー」について考えてみよう。これは複雑で多様な概念だが、単語としてはもともと

作物を栽培したり動物の世話することを指しており、それがやがて人間についてもその精神を訓練したり涵養するという意味で使われるようになった。そしてさらに人間のさまざまな活動と結びつけられ、たとえば芸術のようにその精神活動を表現する粋を示すものとして理解されるようになっていった。十九世紀末のイギリスの詩人で批評家のマシュー・アーノルドが宣言したように、カルチャーは「世界で考えられ語られてきたなかで最高のものである」ととらえられるようになったのだ。つまり、カルチャーが芸術など人間による創造と関係するかたちで語られるようになったのは、ごく最近のことなのである。またイギリスの教育者で批評家のレイモンド・ウィリアムズは、「カルチャー」の現代的な理解には、「理想的（ある絶対的もしくは普遍的価値に基づく人間の完成した状態、もしくはそれにいたる過程）」たとえば文化という概念そのもの、「記録的（知的で想像力豊かな業績）」たとえば文化的な作品、「社会的（人間の特定の生活様式）」たとえば文化人類学的な視点という三つの概念が含まれているとした。³ さてマシュー・アーノルドが考えるような、または「理想的」とされるようなカルチャーは、エリート集団に属する、いわゆるハイカルチャーという概念で表されるものになるだろう。もとは王侯貴族や富裕層、権力者など社会の上流階級によって支持され、享受するために高い教養や知識が必要とされる、完成度が高いとされるカルチャーだ。古典にカテゴライズされるような芸術や音楽、文芸、演劇などがこれにあてはまる。

ハイカルチャーに対応するものとして、メインカルチャーという概念がある。これは、その社会や

集団が主流として支持しており、身につけていくべきと考えられる、享受するためにはかならずしも大変高い教養が必要ではないカルチャーを意味している。その社会の中心となり普遍的に知られているような美術や芸術、音楽、文学、演劇、さらには映画やテレビ番組などのコンテンツもこれに含まれる。ポピュラーカルチャーとの区別でいえば、メインカルチャーとかさなる部分はありつつも、そのなかでより一般向けを意識して発信され親しまれているものがポピュラーカルチャーであると、ここではみなしたい。

さてメインとは主要、中心的なという意味であり、これに対して補助や副を表す英語の接頭辞はサブである。ではサブカルチャーとはどのようなものかといえば、社会の主流と対比すると少数派に好まれ、メインカルチャーとは異なる価値観などもつコミュニティによって支持される、あるいはメインカルチャーを批判するかたちで生まれることがあるカルチャーといえることができるだろう。ここには、ハイカルチャーやメインカルチャーに含まれず、その周縁に追いやられるようなマイノリティの音楽や映画、演劇、小説、ファッションなどがカテゴライズされる。そしてマンガやアニメは、一般的にはサブカルチャーに属するものとみなされてきた。たとえば一九五五年に日本で起きた「悪書追放運動」では、とくに青少年にとって有害であるとみなされたコンテンツが攻撃されたが、世間から「悪い」とされたマンガ作品もその対象となった。悪書とされたマンガ作品は、母の会連合のメンバーによって回収されコマ切れにされたのである（一五四頁）。あるいは、マンガやアニメは子ども

ものものであり、それに耽溺するおとなは異常であるという風潮もある。こういった動きを、その社会でメインとなる集団が認めないカルチャーあるいはその愛好家集団を排斥しようとする働きだととらえた場合、マンガやアニメはメインカルチャーには分類されない。するとこれらはサブカルチャーなのかといえ、とくに現代においてはそう断定できるほど話は単純ではない。

いまの日本で、マンガやアニメが特定のマニアックなコミュニティにのみ消費されているということとはできないだろう。二〇二二年の日本の出版物の売り上げは、「電子コミック（二七・五パーセント）」と「紙コミックス（九・一パーセント）」で合計三六・六パーセントになる。それ以外の書籍が「電子書籍（二・七パーセント）」と「紙書籍（三九・八パーセント）」の合計四二・五パーセントであることをみると、マンガというジャンルが単独でそれ以外のジャンルの総数と比べられるほど圧倒的なシェアを占めているのがわかる。ちなみに他は、「電子雑誌（〇・五パーセント）」、「紙雑誌（二〇・三パーセント）」となっている⁴。またアニメの場合、国民的アニメと呼ばれ、多くの人間が少なくともタイトルや主要キャラクターの外見程度は知っている（たとえば『サザエさん』、『ドラえもん』、『それいけ！アンパンマン』）。もしスタジオジブリのアニメが公開されれば、老若男女問わず映画館に足を運ぶ人は多いだろう。こういった傾向をみると、マンガやアニメは、もはやごく一部の特殊な人間のみが興じる娯楽とはいえないことがわかる。

少なくともいまの日本社会では、マンガやアニメが多くの人に親しまれていないとはいえない。し